
最終回

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終回

【Nコード】

N2573P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

あるドラマが終わる。その関係者達それぞれが思うこととは。ある特撮番組の話を元にして書きました。

第一章

最終回

「一年かあ」

「ああ、長かったな」

「全くだよ」

酒場でだ。中年や若い男達がビールのジョッキ片手に話していた。木の内装の店の中はサラリーマンやOLで一杯である。彼等はその中の座敷の席に座ってそのうえで焼き鳥や冷奴をあてに飲んで話をしていた。

「最初は終わるのかって思ったけれどな」

「終わるな」

「そうだな」

「やつとか？」

一人が言った。

「そんな感じか？」

「そうですね？俺はあつという間でしたけれど」

ここで若い茶髪の男が言った。

「本当に」

「あつという間だったか、御前は」

「はい、一年って短いですね」

彼は周りの言葉にこう答えた。

「そう思いました」

「そうか」

「本当に」

「短かったか？」

「あまり思わないよな」

「今回はな」

だが他の面々は口々にこう言うのだった。あまり面白くなさそう

な顔で。

「色々あったしな」

「揉め事多かったしな」

「揉め事ですか」

その若い彼はその言葉には頷いて返した。

「そういえばそうでしたね」

「だろ？事故も多かったしな」

「何か壊れることなんてしょっちゅうだしな」

「それにだよ」

ここであった。まず一人の顔が歪んだ。

「プロデューサー途中で交代したしな」

「ああ、そうでしたね」

若い彼はそのことに対してすぐに頷いた。また頷いたのだった。

「確かに」

「あれ今までなかったことだからな」

「前代未聞だったんだぞ」

そうだったというのである。

「プロデューサーが作品の製作を統括するからな」

「その交代なんてな」

「本当に今までなかったんですか」

若い彼はいぶかしむ顔で先輩達に問うた。

「そこまでだったんですか」

「ああ、そうだよ」

「その通りだよ」

まさにそうだと。先輩達は答える。

「まああれは仕方ないからな」

「だよな」

「滅茶苦茶だったな」

先輩達はビールを飲む手を少し止めてそのうえでこう話していくのだった。それはどうやら彼等にとってはあまりいい記憶ではない

らしい。

「予算オーバーに過密スケジュール」

「製作間に合わないことも考えられたよな」

「そうだよな」

こう口々に話されていく。

「プロデューサーが統括しているのはいいにしろな」

「脚本にも演出にも口出てきたしな」

「俺達現場の仕事にもな」

「いつも現場まで来てたしな」

「しかもその現場だったな」

それも問題なのだった。どうやらこの作品は問題だのトラブルだのに非常に悩まされた作品だったらしい。それが一年続いたようである。

「田舎とか山とかで撮影してばっかりだったしな」

「移動費もその時間も馬鹿にならなかったしな」

「よくスケジュールも間に合ったよ」

「本当だよ」

「これまでは違ってたんですか」

若い彼は少し戸惑った顔でまたしても先輩達に問い返した。

「それは」

「まあ毎回予算とかスケジュールは頭痛の種だけれどな」

「それはな」

これについてはというのだった。

第二章

「それでもな。あそこまで酷かったのはな」

「ああ、なかったな」

「今までな」

「そうですか」

「そういうことをちゃんとするのがプロデューサーなんだよ」

まさに正論であった。プロデューサーとはすなわちゼネラリストである。ゼネラリストにはゼネラリストとしての仕事があるのである。

「それが真っ先に予算や時間に影響与えてどうするんだよ」

「しかも自分の仕事以外のこともどんどん介入するしな」

「大変だったよ」

また結論が述べられた。

「本当にな」

「この一年修羅場だったよな」

「けれどそれも終わりだ」

こう話されるのだった。

「何とかな」

「まずはゆっくり休みたいよ」

「それで次はちゃんとした予算と時間で作品作りたいよな」

「そうだよなあ」

こんな話をしながら飲む彼等だった。彼等にとってはこの一年はいいものではなかった。そして。

マンションの一室だった。そこで二人の男達が飲んでいた。どちらも中年である。二人は暗いその部屋の中で飲みながらそのうえで話をしていた。

「すいません」

「あのことが」

「はい、本当に」

若い温厚そうな顔の男がいかつい、その筋の人間にしか見えない男に対して言っていた。見れば二人はスコッチをロックで飲んでいる。

「助かりました」

「それはいい」

だが強面の男はこう返すのだった。

「それはな」

「いいとは」

「俺は好きで引き受けたんだ」

そしてこんなことを言った。

「だからな。いい」

「左様ですか」

「だから気にするな」

彼はまた言った。

「このことはな」

「それなら」

「俺が書かなかつたら間に合わなかつたろ」

強面の彼はこうも述べた。

「そうだったな」

「はい、それは確かに」

「あの作品が潰れるだけじゃなかった」

「シリーズ自体の危機でした」

「それを放っておけるか」

これがこの強面の彼の言葉だった。

「だからいいんだよ」

「それでだつたんですか」

「それにあの時言つたよな」

強面の男は相手を見てきた。その目の光はかなり強い。
「覚えてるか」

「はい、あの言葉ですね」

「御前の願いを聞かないわけにいくか」
「そう達というのであつた。」

「そういうことだ。気にするな」

「それでだつたんですか」

「ああ、そうだ」

強面の彼はここでそのスコッチを一杯飲んだ。独特の風味と香りが口の中を支配する。それと共に身体に入る酔いをも堪能しながら飲んでいた。

「そういうことだ」

「じゃあ今度は私が」

「それもいい」

強面の彼は相手の礼を受け取ろうとはしなかった。

「俺はそんなことは求めないからな」

「ですか」

「とにかく飲め」

話をそこにやるのだつた。

「わかつたな」

「はい、それじゃあ」

こうしてだつた。彼等はそのスコッチを飲んでいく。男だけで飲んでいた。しかしそこには見えはしない心地よいものも確かに存在していた。

第三章

少し中年の背の高い男がだ。眼鏡の男に対して話していた。山の中であり緑の木々が周りにある。斜面は中々急な険しい山である。その木の一本に背をもたれさせかけてだ。彼は話していた。

「前半はよかったよ」

「前半は、ですか」

「ああ、前半はな」

そこはだというのだ。

「よかったよ。けれどね」

「後半は、ですか」

「何かねえ」

彼はここでだ。首を捻るのだった。

「不完全燃焼っていうかね」

「駄目でしたか」

「何か違うだろ。前半のプロデューサーさんはさ」

「役者さんの意見聞いてくれましたよね」

「よくね」

そのことには満足しているというのだ。

「聞いてくれるどころかね」

「意見も作品に反映してくれて」

「会議にも参加させてくれたし」

そこまでしたというのだ。

「凄くよかったよ」

「作品を丁寧に作っていましたよね」

「お金と時間をかけてね」

彼のマネージャーへの言葉はここでは満足したものだった。

「よかったよ。けれどね」

「プロデューサーさんが交代してからは」

「予算も時間もかなり圧縮されて」
口を尖らせて言う。

「しかも会議とか呼ばないしね」
「そうですね」

「おまけに作風が全然変わって」
不平は続く。

「何か別の作品に出てみたいだよ」
「そこまで、ですか」

「そこまでだよ。何か釈然としないね」
彼はまた言った。

「最終回の脚本だってね」
「あれもですか」

「あれはないんじゃないかな」
彼は脚本についても不平を述べた。

「どう思う？」
「どうと言われましても」

「だから違うんだよ。あの作品は前半でいくべきだった」
これが彼の意見だ。

「本当にね」
「まあそれでももうすぐ終わりですね」

マネージャーは不平が尽きない彼をさりげなく宥めた。
「打ち上げは楽しくやりましょうよ」

「二人だけでこっそりといきたいね」

彼は明らかに不平を抱えていた。そうした中で最終回を迎えようとしていた。そしてネットにおいては、ファン達が延々と罵り合いを続けていた。

「だから仕方ないだろ」

「仕方ないっていいのかよ」

「予算と時間には限りがあるんだよ」

このことが言われるのだった。

「だから仕方ないだろ」

「それにあれで一年で終わっただのか？」

「こんな意見も出た。」

「三年か五年はかかっただろ」

「あのシリーズは一年だしな」

「このことも話される。」

「一年で終わらないと駄目なんだぞ」

「それであれだけ進まなくてどうするつもりだったんだ」

「だからあれでよかったんだよ」

「こうした意見が出される。しかしであった。」

「もう一方はだ。あくまでこう主張するのだった。」

「それでもあのままいけばよかったんだよ」

「絶対にそうするべきだったんだ」

「名作になれたんだぞ」

「これが一方の意見だ。しかもであった。」

「彼等はさらにだ。こうまで主張した。」

「あのプロデューサーと脚本家は許さないからな」

「殺してやる」

「過激どころではない言葉だ。」

「というか死ね」

「地獄に落ちろ」

「無茶苦茶な状況になっていた。一方は完全に暴論だった。」

第四章

「あの二人が作品を歪めたんだぞ」

「何があっても許すか」

「家に火を点けてやる」

最早感情論どころではなかった。その彼等にだ。

一方は呆れながらも。こう言った。

「じゃあそのままシリーズが終わってもよかったんだな」

「そう言うんだな」

「ああ、そうだ」

「名作の前には何もいらないだろうがよ」

「こりやどうしようもないな」

「話にならないぞ、この連中」

ネットでは路線変更以降延々と罵り合いが続いていた。最終回まで続いていた。それが収まる気配はなく長期戦の様相さえ示していた。

だが時間は止まらない。遂に最終回となった。

全てが終わってだ。まずスタッフ達とプロデューサーはほっと胸を撫で下ろした。

「やれやれ」

「やっと終わったよ」

「本当にな」

肩の荷が下りた顔であった。

「それじゃあ次の番組だな」

「ああ、かかるか」

「気持ちを切り替えてな」

「そうしような」

騒動が終わったといった様子だった。そうしてである。脚本家はだ。もう家で次の作品の脚本を書いていた。

「よし、これでいいな」

煙草を啜えながら自分の書いているものを見ていた。彼にとっては自分の仕事を終わらせてだ。満足した面持ちで次の仕事にかかっていたのだ。

その夜にはだ。マンションで打ち上げが行われていた。

そこでだ。彼はうんざりとした顔でマネージャーに話していた。その手にはグラスがある。そこには焼酎がロックで入っていた。

彼はそれを飲みながらだ。言うのだった。

「何かねえ」

「やっぱり不満ですか」

「あのままいけばよかったんだけれどね」
こう話すのだった。

「本当にね」

「けれどそうはいきませんでしたね」

「残念だよ」

ぼやく顔だった。

「お陰で酒がまずいよ」

「まずいですか」

「うん、まずい」

これが彼の言葉だった。

「とんでもなくね」

「それじゃあ次はですね」

「次は？」

「美味しいお酒を飲みましょう」

ここでも彼を宥めていた。

「そうしましょう」

「次の仕事でかい」

「はい、次があります」

これがマネージャーの意見だった。

「次がありますから」

「次かい」

「もう次の仕事は入れてますから」

マネージャーにしてみても彼の機嫌がよくなってもらうことに越したことはない。それで彼に気付けられることなくフォローを入れるのであった。

「ですから」

「わかったよ。それじゃあね」

「はい、次の仕事に」

「かかるでしょう」

こうしてだった。彼は何とか次の仕事に考えを向けた。不平を胸に抱いたまま。

ネットではだ。最終回についても議論というよりは罵り合いが続いていた。それはもうどうしようもない有様であった。何処までも醜い。

「プロデューサーも脚本家も死ね」

「地獄に落ちろ」

「もうシリーズに関わるな」

こう書き込まれていく。

第五章

「絶対にだ」

「もう何もするな」

「さもなければ死ね」

「御前等何時までそんなこと言ってるんだ？」

「それに奇麗な最終回だっただろ」

「なあ」

そんな彼等に対してもう一方は冷静さを保っていた。

「あれでな」

「よかったじゃないか」

「いや、駄目だ」

「あんなのは駄目だ」

しかし予想通りと言うべきかもう一方はこうだった。

「あの作品の最終回じゃないんだよ」

「絶対にな」

「おい、じゃあどんなのがいいんだよ」

「どんな最終回だったらいいいんだよ」

一方は思わず問い返した。

「あれで駄目だったらな」

「どんなのがいいんだよ」

しかしそう言われても具体的な返答はなかった。ただ感情的に滅茶苦茶な反論があるだけだった。この騒動が何年も続いたのだから恐ろしい。

そしてだ。その騒動の元はだ。程なく左遷された。

そうして社内の史料編纂質でだ。一人吼えていた。

「俺はこのままでは終わらないぞ！」

こう叫んでいた。

「必ずだ！もう一度作品を！」

「じゃあそれでだね」

同じ部屋の中にいた定年間際のベテラン社員が彼に問うた。この社員は長い間勤めていて定年前に最後の仕事をここでしているのだ。「どんな作品を作るんだい？」

「決まっていますよ」

こう返す彼だった。

「あの作品よりもずっとですね」

「ずっと？」

「そう、ずっとです」

まずはここからだった。

「ずっと素晴らしい作品を作りますよ」

「その意気込みやよし」

ベテラン社員もそれはよしとした。

だが、だ。彼にさらに問うのだった。

「それでだけれど」

「はい、それで」

「予算や時間はどうするんだい？」

作品を作るうえで最も根本的な問題点である。

「それは」

「そんなものですか」

彼はいきなりこう返した。

「そんな些細なことですか」

「些細かい？」

「はい、些細です」

その作品を作るうえで最も考えなくてはならないこの二つをばっさりと切り捨てる。その二つが彼のアキレス腱になっていてもである。

「何でもないじゃないですか」

「それじゃあ気にしないのかい」

「予算？時間？納期？」

納期まで話に出す。

「そんなものはですね」

「うん、そんなものは」

「作品をつまらなくする為の縛りですよ」

邪魔でしかないというのである。

「予算も時間もたっぷりかけてこそいい作品ができるんですよ」

「そう思うのかい」

「作品は芸術です」

一理はあった。

「芸術にお金や時間を惜しんでは駄目ですよ」

「だからかい」

「完璧でないと駄目なんですよ。そしてその為にはです」

「予算や時間はどうでもいいんだね」

「そんなものにこだわっていたら何にもなりません」

この考えを変えようもしない。

「だから今度こそです」

「予算や時間を気にしないでかい」

「はい、完璧な作品を作ります」

しかもこんなことまで言った。

「人も使って」

「ああ、現場のスタッフも」

「当然俺も現場に行きますよ」

これがいつもだから恐ろしい。プロデューサーは作品を広範囲に統括するのだが彼は現場にいつも来ていて些細なことまでクレームをつけていたのだ。

「演出もしますし演技指導も脚本のチェックも」

「つまり何でもだね」

「しないと駄目です」

現場も他のスタッフの意見も仕事も無視して、というのである。
「やってみせますよ」

「つまり今まで通りかい」

「努力が足りなかったんです」

自分の更迭の原因はそれだと考えていた。

「ですから今度こそは」

「今度ね」

「はい、今度はです」

机から立ち上がって意気高らかに言う。

「完璧な作品を作ります」

「そうなければいいね」

ここからは彼に聞こえないようにして出した言葉だ。

「その機会があれば」

「俺はこんなところでは終わらない!」

彼の絶叫は続く。

「必ずや。もう一度!」

何とそれは適えられた。ただし別の会社でだ。しかしそこでも相変わらずであり大きな騒動を引き起こしていた。最終回になって関わった者達はそれぞれだった。まさひ悲喜こもこも、人それぞれだった。

最終回 完

2010・7・31

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2573p/>

最終回

2010年12月1日22時10分発行